

現場との協働による児童・生徒作文能力の経年変化に関する発展的研究

宮城 信（富山大学 人間発達科学部 准教授）

（研究計画の立案の背景） 本研究グループでは、作文コーパスを利用して児童らの文章作成能力を多角的な観点から解明していくことに取り組んでいる。前研究（「現場との協働による児童・生徒作文能力の経年変化に関する研究」）では、児童らの文章作成能力の経年変化や学年間の変化・発達について調査を進めてきた。その過程で、国語科の教科書では多様な文種の文章が扱われているが、現状では児童・生徒が様々な文章を書く準備（指導も含めて）十分ではないように思われた。よって、本研究では児童らの作文を実践的に指導するため次の2つの探求課題を立て研究を進めることとした。

（探求課題） 1つ目は、語のカテゴリ分析の問題である。現状の調査年別・学年別の語彙表（延べ、異なり）は、使用語彙の形態だけを問題としている。例えば「異なる」と「差がある」が同一カテゴリに入ることや「怒る」と「血が頭に上る」がほぼ同じ文脈で使用されていることを分析の俎上に載せたいと考えた。これは文脈上での語の意味の問題である。

2つ目は、文章の評価の問題である。どのような文章が良いのか（評価が高くなるのか）は、教師の主観により判断されかなりの程度揺れがあると予測した。その有無を調査すること、また作文の特徴のどのような点が評価と結びつきやすいのかということ、について現職の教員に評価を依頼して作文評価の基準について研究を進めた。

それを基礎資料として、前研究に加えて、文末のモダリティや比喩表現、条件表現にまで考察の幅を広げることができた。

（研究方法） 研究に先行して、構築済みの『「手」作文コーパス（1992,2016）』（24年前（1992年）に書かれた「手」を題とする作文と同条件で2016年に書かれた作文のコーパス）の2つを用いて以下の様な作業を実施した。

（1）コーパスの追加アノテーションを実施：形態論情報付与（品詞分類、活用形等）に加えて、新たに意味情報付与（他コーパスとの連携も取りやすい「分類語彙表番号」を選択した）を実施した。本研究では、実績があり、（現代日本語書き言葉均衡コーパスでも分類番号付与を採用した。なお、一部試験的に実施した付与作業から、形態論情報より機械解析の精度が低いことが分かったので、分析に耐える資料とするため、可能な限り人手修正を実施しコアデータを作成した。

（2）現職教員による作文の評価データを付与：同程度の文字数の作文をランダム抽出して、現職教員に依頼して作文の評価（総合的評価）を実施した。また、別途同作文での観点別評価を依頼し、観点別評価毎に総合評価との関連性を分析した。現職教員による作文の評価がアノテーションされたコーパスは希少で、おそらく今後の文章論研究においても利用価値が高い（本研究でも作文評価を利用した分析がある）。このように構築されたコーパスに基づき、本研究では、児童生徒の文章作成能力の学年別発達過程と経年変化とを組み合わせた分析を進めた。一方、従来の主要な方法である作文を読み込むことによって児童らの実態を図る質的調査も実施している（ただし、いずれも計量的な分析結果も併記してある）。

（結果・成果） 本研究では、以下のような研究課題について考察し成果を得た。

基礎研究 ・対比・比較の思考の表れの観点からの検討

- ・児童「手」作文における条件表現の分析—順接条件を表す条件表現に着目して—
- ・児童・生徒作文に見る文末表現の発達—「手」作文の場合—

応用研究 ・現職教員による児童・生徒作文の評価基準の分析

- ・児童・生徒作文の日本語修辞ユニット分析と教員評価の検討
- ・【資料】ある作文コンクール審査過程の記録
- ・【資料】『児童作文コーパス』コアデータの構築と UniDic 辞書による作文資料解析

形式的であった前研究に比べて、本研究では、質的・意味的・主観的な観点にも踏み込み、より多角的な観点から研究を深めることに成功している。よく耳にするのは、直接子どもを見ないで何が分かるという批判である。勿論それを理解した上で、それでは捉えられないものを掴んでおり、作文コーパス研究の妥当性を証明した。本研究の成果はこれまでの経験主義的な国語科教育研究の方向性に一石を投じることができたと考えている。都合3年に亘り作文コーパスを用いた分析を進めることによって、意外な結果が得られたこと、教師の直感を客観的に証明できたこと等が成果である。一方、教師の感覚を反映できる結果が得られなかったこと、作文コーパス（延いては文字資料）としての限界を感じたことが今後の課題である。話し言葉や完成に至る前の構想段階の資料等も含め調査対象を広げていくことが必要であることが確認された。

共同研究者：浅原正幸、阿部藤子、今田水穂、宗我部義則、富士原紀絵、松崎史周